

# 道元禪師と法明禪師の「嗣法」について

丁濟幙(東北学院大学)

## 0. はじめに

「嗣法」という言葉は、<sup>1</sup>、「法統を嗣続すること」と定義されている。その「法統を嗣続すること」とは、法灯を継承する意味<sup>1</sup>である。法灯は、仏教では仏が説く真理、教説、または仏の教えが絶えずに伝わっていく歴史を示すことであると広く知られているが、禪門においては、仏（釈尊）が弟子である摩訶迦葉に付嘱した正法が、師匠から弟子に代々に印証されて伝わって、今日に至る禪門の伝統と系譜を意味する。仏とその弟子たちのように、出家した僧侶の身であって、徹底的に真理をさとらなければ、（徹底大悟）「嗣法」を授けることはできなかった。

日本曹洞宗の開祖である道元禪師（一二〇〇～一二五三）が寛喜三年（一二三一）八月の三二歳の時から慶長五年（一二五三）五月の五三歳に至るまでの、禪師の説法の集大成であって代表的な著作<sup>2</sup>である『正法眼蔵』の題目も、釈尊と摩訶迦葉の逸話<sup>3</sup>から引用したものである。さらに禪師は『正法眼蔵』で『嗣書』の巻を用意し、序頭に「仏々かならず仏々に嗣法し、祖々は必ず祖々に嗣法する。」と記したように、この「正法を付嘱」する師資相承の関係は禪宗、さらには道元禪師に重んじられていた。

道元禪師の弟子は多くいるが、嗣法した弟子は三人といわれている。しかし、山形の寺院では、中国の禪宗の「嗣法」の伝統が、実際に日本の地で道元禪師と高麗出身の僧侶である法明禪師（？～一三〇八？）によって再現されたと伝わっている。果たしてその模様はどうであったのか。本報告では道元禪師の「嗣法」の過程と永平寺で道元禪師と法明禪師との間に行われた問答を取り上げ、道元禪師における「嗣法」と、韓国と日本の禪者たちの交流と対話を照明したい。

## 1. 研究目的

本研究は、韓国と日本の禪思想の普遍性と特殊性を解明することの一環として、日本を代表する禪僧である道元禪師の思想研究に加えて、東北禪文化のアイデンティティの形成過程を明らかにすることに貢献しようとするものである。東北の曹洞宗は、始祖道元の印可をもらった高麗僧法明禪師が創建した出羽玉泉寺をはじめ、各所で形成された寺院が地域と密着・変貌し構築された。東北の仏教が土着・制度化された過程は、永平寺—中心部の教理と東北の旧来信仰との、神学的葛藤<sup>4</sup>と調和が重層的に組み合って現れるが、今度の研究は其中で、教理と正統性に重点を置いて検討しようとする。

## 2. 本報告の主要資料について

・『正法眼蔵』：道元禪師が著述した和文体の法語集である。山城深草の安養院、興聖寺、永平寺などの七か所で示衆（説法）されたもので、合わせて九十五巻に至る。「弁道話」～「八大人覺」が収録された元禄三年（一六九〇）の九五巻本が本山版の底本になっている。

---

<sup>1</sup> 駒澤大学編『禅学大事典』 p 443、p 462 参照

<sup>2</sup> その他に『普勸坐禅儀』、『永平寺清規』などがあり、入寂後に弟子が編集した書物として『宝慶記』、『正法眼蔵随聞記』がある。

<sup>3</sup> 拈華微笑「吾れに正法眼蔵涅槃妙心実相無相微妙の法門有り、不立文字、教外別伝、摩訶迦葉に付嘱す」

<sup>4</sup> 法明禪師の場合、留まろうとした禪師に不思議な老人、または神人が、永平寺に行かせることですこしその面を現れる。

・『日本洞上聯燈録』<sup>5</sup>：嶺南秀恕禪師が書いた書籍で寛保二年（一七四二）刊行された曹洞宗の歴史書。三十余年にわたり資料を集め、道元禪師以下の七四三人の法脈を説明している。

### 3. 先行研究の確認

日本での法明禪師の研究は、佐藤秀孝氏の研究<sup>6</sup>がある。佐藤氏は『玉泉寺縁記』の調査作業に直接参加し、法明禪師における曹洞宗と臨済宗の数少ない伝記資料と法界図を聚合し、分析を行った。その結果、もともと著作も存在しなかったのが、実在した人物であったかも疑問視された法明禪師の全貌が多く明らかになっている。佐藤氏によれば、法明禪師は日本の出羽国（現在の山形県）の羽黒町玉川玉泉寺の開山祖であり、永平寺であった一宿覚の逸話の再現<sup>7</sup>から道元禪師の法孫である同時に曹洞宗の僧と認識され、宋で修学した経歴からは臨済宗とも記録された僧侶である。

法明禪師は高麗から宋に留学し、臨済宗の無準師範（経山仏鑑、一一七八～一二四九）禪師の門下で修学した<sup>8</sup>。その後、日本に渡航し、出羽国黒郡で留まった。時期不明であるが、越前永平寺（現福井県）にいた道元禪師を尋ね、問答の末に、道元禪師に嗣法し、玉泉寺を中心に出羽地方に禅風を巻き起こしたと伝えられている。嗣法について佐藤氏は、「ともあれ（参学か嗣法か）中国僧の寂円（一二〇七―一二九九）ともに高麗僧法明の名が知られるわけであって、これは初期曹洞教団の持つ国際的な性格を知る上でも注目すべきものがあるだろう。」<sup>9</sup>と述べている。

### 4. 道元禪師の「嗣法」について

道元禪師は南禅宗の六祖慧能（六三八―七一三）から、洞山良价禪師（八〇七―八六九）、天童如浄禪師（一一六三―一二二八）に繋がるの曹洞宗の法脈を受け継いだ僧侶である。禪師は、日本曹洞宗では高祖と称され、嘉永七年（一八五四）では、孝明天皇より佛性伝東国師、明治十一年（一八七八）に承陽大師の諡号を賜った。俗姓は源氏、比叡山で出家し、比叡山横川的首楞嚴院で留まり、座主公円僧正で得度する。園城寺の長史で僧侶公胤を訪ね、建仁寺で栄西禪師の高弟である明全禪師に師事した。明全禪師とともに嘉定十六年（一二二三年）宋に渡り、天童山景德寺の如浄禪師に門下で修学し、「身心脱落」（さとり）を経験した。午前四時僧堂で座禅を行っている途中、道伴を警策する如浄禪師の声、座禅が「身心脱落」であるという言葉で豁然大悟した。「嗣法」を受けて、羨望していた印可状である嗣書をもらい、帰国した。

- ・「嗣書」（入寂した法眼宗の僧侶の「嗣書」をみて）

予道元、これらを見しに、正嫡の、正嫡に嗣法あることを決定信受す。未曾見の法なり。仏祖の、実感して児孫を護持する時節なり、感激不勝なり。<sup>10</sup>

- ・身心脱落（さとの瞬間）

「天童五更坐禪、入堂巡堂、責納子坐睡云、参禪者身心脱落也。祇管打睡恁生。師聞豁然大悟。早晨上、方丈、焼香礼拝。天童問云、焼香事作麼生。師云、身心落々来。天童云、身心脱落、脱落身心。師云、這爾是

<sup>5</sup> 『玉泉寺縁起』（天台宗の学僧である 天宥（?～一六七四）が記述した網地紺糸に金泥字の一卷。）などを参考にしたが、『玉泉寺縁起』の内容面に事実と認めにくい難い部分を除いた。（佐藤秀孝（一九九四）「出羽玉泉寺開山の了然法明について」p 203）

<sup>6</sup> 佐藤秀孝（一九九四）「出羽玉泉寺開山の了然法明について 一道元禪師に参じた高麗僧一」駒澤大学仏教学部研究紀要52 p 201～256  
佐藤秀孝（二〇〇八）「了然法明と三処の玉泉寺：永平寺道元に参じた高麗僧」宗学研究50 p 63～68

<sup>7</sup> 佐藤秀孝「了然法明と出羽玉泉寺-道元・瑩山両祖と関わった高麗僧-」印度學佛教學研究43巻（一九九四）p171 六祖慧能と永嘉玄覺禪師（六六五―七一一）の伝承である。

<sup>8</sup> 「嗣法」の有無に関しては臨済宗と曹洞宗の意見が別れる。

<sup>9</sup> 佐藤秀孝（一九九四）同書 p 222

<sup>10</sup> 『道元全書 一』『正法眼蔵』「嗣書」p 426「初祖摩訶迦葉は、釈迦牟尼仏に悟り、釈迦牟尼仏は、迦葉仏に悟る。」と書かれている。

暫時伎倆、和尚莫乱印某甲。童云、吾不乱印倆。師云、如何是不乱印底。童云、脱落々々。」<sup>11</sup>

- ・「面授」（師と弟子が仏法の口訣を語りながら、仏法を授けること。）  
「菩提達磨尊者にいたる。菩提達磨尊者、みづから震旦国に降儀して、正宗太祖普覺大師慧可尊者に面授す。五伝して曹溪山大鑑慧能大師にいたる。一十七授して、先師大宋國慶元府太白名山天童古仏にいたる。大宋宝慶元年乙酉五月一日、道元、はしめて先師天童古佛を妙高台に焼香禮拜す。先師古仏、はしめて道元をみる。そのとき。道元に指授面授するにいはく。佛佛祖祖面授の法門、現成せり。これすなるち靈山の拈華なり、嵩山の得髓なり。黄梅の伝衣なり。洞山の面授なり。これは佛祖の眼藏面授なり。吾屋裏のみあり。餘人は夢也未見聞在なり。（……中略）道元。大宋宝慶元年乙酉五月一日。はしめて先師天童古仏を禮拜面授す。やや堂奥を聴許せらる。わづかに身心を脱落するに。面授を保任することありて。日本国に本來せり」<sup>12</sup>

#### ◆年表<sup>13</sup>

正治二年（一二〇〇） 京都に生まれる。（同年二月、榮西禪師が寿福寺を開山。）  
建仁二年（一二〇二）十月、源通親没。（前年三月、親鸞上人が法然上人の門下となる。）  
承元一年（一二〇七）冬に母没。（同年二月、幕府が専修念仏を禁止、法然・親鸞上人らは流罪。）  
承元二年（一二〇八）『俱舍論』を読む。（京都大火災）  
建保一年（一二一三）四月、天台座主公円に得度、戒壇院で受戒（前年、法然上人入寂。）  
建保五年（一二一七）秋、比叡山を離れ、建仁寺の明全禪師に参ず。（前年、榮西禪師入寂。）  
貞応二年（一二二三）二月、明全禪師と入宋。四月、慶元府に到着。七月、天童山入山。  
嘉禄一年（一二二五）五月、天童山で如浄禪師の門下に。（前年、無際禪師の死により諸山歴訪。）  
安貞一年（一二二七）秋、如浄禪師に別れを告げ帰国、建仁寺に戻る。『普勸坐禅儀』執筆。  
寛喜二年（一二三〇）建仁寺を出て深草に閑居。（大飢饉発生、次の年、『弁道話』を著す。）  
天福一年（一二三三）興聖寺建立。『学道用心集』著述。冬、懷奘禪師参随す。『随聞記』の筆録。  
寛元一年（一二四三）七月、越前下向し、（次の年、七月、大仏寺開堂供養。9月法堂完成。）  
寛元四年（一二四六）六月、大仏寺を永平寺と改称。（北条時頼が執権となる。）  
宝治一年（一二四七）八月、鎌倉下向。（次の年、三月、鎌倉より帰る。）  
建長五年（一二五三）七月、懷奘禪師を永平寺住職に、八月、上京、同月二八日に入寂

## 5. 永平寺での法明禪師と道元禪師の「嗣法」について

道元禪師は、祖師が祖師を証契して伝う仏法の宗旨は、仏と仏でなければ明らかにならないことで、いわゆる十地等覺の菩薩であろうとも量ることができないと見た。<sup>14</sup> 道元禪師の「嗣法」は、師資相承における禪宗の伝承・伝統を守っていて、印可を授けることが厳しかったが、法明禪師は道元禪師の「嗣法」を授かったと思われる。場所は道元禪師が晩年を過ごした永平寺であって、時期は、大仏寺が永平寺と改称された寛元四年（一二四六年）以降で、夜には日本で最初の晩参（夜の座禅）が行っていたので、昼の時間と推測される。

短い問答の中で、法明禪師は高麗の出身であると話すと、道元禪師は歩んできた「道」に記憶に残ることがあるかと質問した。禪師は記したことがないと答えた。<sup>15</sup> その後、法明禪師は米がご飯になる過程に比喻し、衆生から仏に、仏から衆生になれる意を説いた。道元禪師は末年の臨済宗に

<sup>11</sup> 『三祖行業記』（曹洞宗全書本）

<sup>12</sup> 『道元全書 二』『正法眼蔵』『面授』p 55～56、60

<sup>13</sup> 『道元辞典』、『禅学大事典』、『道は無窮なり』参照

<sup>14</sup> 『道元全書 一』『正法眼蔵』『嗣書』p 426 「この道理の宗旨は、仏々にあらざれば、あきらむべきにあらず、いはんや十地等覺の所量ならんや。」

鏡島元隆『道元禪師の引用經典・語録の研究』木耳社 1965 p 215～260 出典は不明。ただし、瑩山禪師（一二六八—一三二五）が著述した『伝光禄』引用の出典では、『大般涅槃經』、『雲門匡眞禪師廣録』

<sup>15</sup> 元問う、「甚処の人ぞ。」師曰く、「高麗国。」元曰く、「路は少ぞ」、師曰く、「途程を記せず。」佐藤 同書 p 219 を引用。読み下し文は佐藤氏のものを引用した。原文：「元問甚處人師日高麗國元日路多少師日不記途程」

対する厳しい発言とは違い、臨済宗の無準（経山仏鑑、一一七八―一二四九）禅師の門下で修学した法明禅師を高く評価した。法明禅師は「師の証明を謝す」<sup>16</sup>とし、印可に対する感謝の礼を上げたのである。ここで道元禅師が法明禅師に「化縁の時は至れり、速かに旧趾に回り、大いに玄旨を聞き、永く未来際に利済せよ」<sup>17</sup>と、自己の修行だけでなく、衆生のための利他行も進めた。ここから法明禅師が道元禅師に「嗣法」したと類推できる。さて、その教示に従い法明禅師は山形県の曹洞禅の初祖になり、地域の聖地と尊崇された羽黒山の入口である善見村に禅寺を建立し禅宗を東北地方に伝えた。

## 6. むすびにかえて

道元禅師の入寂後、曹洞宗の四代目の祖師である瑩山紹瑾禅師が著述した『伝光禄』でも、十地の聖人が雲・雨のような説法をしても、仏に叱られると書かれたように、「嗣法」と「嗣書」前提条件であるさとりに関する道元禅師の見地はよく相続されていた。禅師が禅宗特有の仏と祖師たちにおける禅宗の歴史観に確信をもち、如浄禅師から「嗣法」して、その法統は法明禅師に伝わった。道元禅師が『仏性』の巻で引用した「人有南北なりとも、仏性無南北なり」<sup>18</sup>の慧能禅師の古事のように国籍、身分、今までの修学の経路を問わず、そのさとりの見地だけをみたことであった。

本報告の課題として、著作の多く残っている道元禅師と違い、法明禅師の資料が少いということ克服するために、東北の寺院の踏査が必要であるということと、先行研究が言及した一三世紀の高麗の時代的背景からより一歩進み、法明禅師の高麗からの旅路を探り、道元に会うまでの禅師の人物像をより明確することなどがある。

### 【参考文献】

- 鏡島元隆『道元禅師の引用經典・語録の研究』木耳社 1965  
河村孝道『道元禅師全書』1993 春愁社  
佐藤秀孝「了然法明と出羽玉泉寺-道元・瑩山両祖と関わった高麗僧-」 印度學佛教学研究43巻 一九九四 p168～173  
佐藤秀孝「出羽玉泉寺開山の了然法明について -道元禅師に参じた高麗僧-」 駒澤大学仏教学部研究紀要 一九九四  
佐藤秀孝（二〇〇八）「了然法明と三処の玉泉寺：永平寺道元に参じた高麗僧」 宗学研究50 2008 p 63～68  
佐藤秀孝「出羽玉泉寺開山の了然法明について」  
船岡誠『道元 道は無窮なり』ミネルヴァ書房 2014

### ・辞書

- 中村元『岩波仏教事典』岩波書店 1989  
駒澤大学内禅学大辞典編纂所編『禅学大辞典 全三冊』大修館書店 1978  
菅沼晃編『道元辞典』東京堂出版 1976

### ・データベース

- 国立国会図書館デジタルコレクション (ndl.go.jp)：『日本洞上聯燈録』

---

<sup>16</sup> 『日本洞上聯燈録』「師曰謝師証明」道元禅師の「吾が這裏に箇の虚頭を容れず。」の句に対する感謝である。原文：「日吾這裏不容箇虚頭」

<sup>17</sup> 『日本洞上聯燈録』「化縁時至速旧趾回舊大闡玄旨永利済未来際」

<sup>18</sup> 『道元全書 一』p23